

スーパー高画質+ホームエンターテインメントマガジン

AV REVIEW

VISUAL&MULTIMEDIA

平成11年2月25日発行第16巻第1号年6回刊通巻83号
ISSN0289 6044

1999・2

83

HOME THEATER EX.

ホームシアター・イー・エックス

特集1

DVDのすべて

- 最新プレーヤー全15モデルをスクランブルテスト
- クオリティアップの秘訣とアクセサリ全18品種をテスト
- 気になるソフト情報とDVDの基礎知識

特集2

AVラックで収納王になる!

国産の定番から最新の海外製品まで全14モデルをテスト



達人の輪



DVDが仕切り直しです だからこそ今度は持続的に、 それからみんなで育てたい

師 伏木雅昭

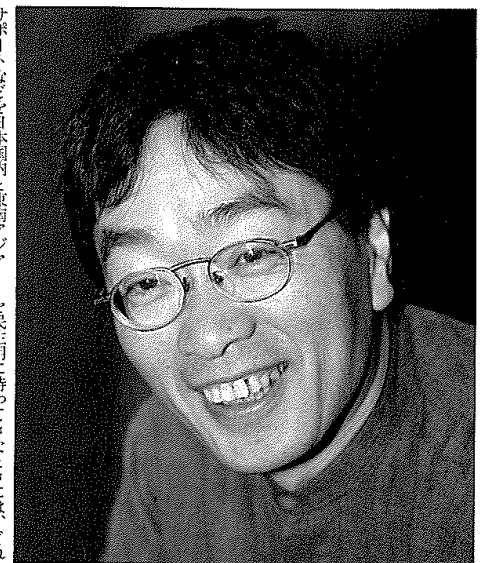
MASAAKI FUSHIKI

ドルビーラボラトリーズ インターナショナルサービスインク
日本支社 ジェネラルマネージャー

国内普及に努めた、 ドルビーのスポークスマン

AVファンなら名前くらいは知っている「ドルビーサラウンド」、そのフォーマットを作り出したのが「ドルビーラボラトリーズ」という、スタジオの音響技術を長年バックアップしてきた会社だ。今回の匠は、その「ドルビー」と日本メーカーの橋渡し役として、ノイズリダクション時代から、現在に至るまで活躍してきた、ドルビージャパンの伏木雅昭氏である。

「実体として物を売っていないです。ユーザとの接触はあまりないですね。実際にはライセンス契約しているメーカーさんとの日常的な連絡の潤滑役というところで。製品の技術的な問題や、商標のチェック、ソフトの



サポートなどを日本国内と東南アジアの一部の地域でやっています。世界のオーディオ機器の生産拠点という観点でも日本は中心的存在で、日常的な活動をどれだけやらなければならぬかが大きくなっていきます。」
伏木氏はドルビージャパンの統括をするジェネラルマネージャーである。ドルビーのフィロソフィーは現在まで一貫している

今や映画のサラウンドシステムというイメージのドルビーも、少し前まではカセットテープのノイズリダクション（ノイズ低減装置）が代名詞だった。「最初は業務用のノイズリダクションを米国人のドルビーさんが開発して、会社の形にしたのが1963年。業務用としての性能の安定性に加え、それ

だなどと思ってくれるわけです。先親的に出すという活動ではなくて、5チャンネルを普及させたい、知ってもらいたいというものです。」
ドルビーサラウンドは日本に仕掛けた

根付かないと不信感を持っている旧来のオーディオファンをどのように考えさせるか。

「まず、4チャンネル時代というのが1969年であって、1年くらいで一気に入った。その不信感も最初はドルビーシステムを出したときから強いですね。ソフトでこんな面白いものがあるよとか、あのころは映像がなかったから楽しんではわかって、という話を聞かせるんだだけ、オーディオの経験の長い人ほど、そういう抵抗は確かに強いです。」

「またドルビーサラウンドは80年代後半に軌道に乗って、アンブレラAVアンブレラという効果の高いのをマークトに提案しましたけど、ある瞬間、メーカーさんがソフトしたのへんは、ちょっとリーグの生い立ちにも見えてしまいます。持続的にもうちょっとと我慢できないものかなって。」

「ヤマハさんはコトコトとやってきたメーカーのひとつで、ヤマハがジュビロ盤留（形）なのかわかりませんが、現職者（形）の持続的な努力をやった力から再生するだけです。黒澤明さんの『影武者』なんかはドルビーステレオエンコードされたことだから、初期のデモでは素材として使いました。」

マルチチャンネルの普及には持続力が不可欠
ではドルビーサラウンドの仕掛け人は、今でも多い、マルチチャンネルは

「ある意味でDVDが仕切り直します。かというところになると思います。」

だからこそ今度は持続的にやりたいんだと。それから育てることをみんなで行いたい手段。3年ほど前から近づいているパーチャルドルビーにも力を入れていきたいと思っています。」

ドルビーの姿勢が貫かれている。「もともとルカスが新しい作品のためにチャンネルを増やしてアピールしたいという話で、割と現実的にできることを選んだんだと思います。ルカスフィルムは前「スターウォーズ」のときもやはりドルビーステレオを積極的に使って評価を得ました。その意味でもう一度、新たなチャンネルを積極的に使って評価を得たいという話で、複雑な気持ちになるのだが、」

さて、90年代はジョージ・ルーカスの「スターウォーズ」新3部作でドルビー6.1チャンネルが噂されているが、実際のところはどうかだろうか。

「ドルビーサラウンドEXですね。EXはDolby DigitalとかDolby Digitalとか、1つ増えたからというけど、定義をした名前じゃないと思います。それに6.1とは呼びたくありません。デイスクリートのチャンネルが1つ増えたという誤解が生じるかもしれないので。」

「EXはサラウンドが3チャンネルに増えます。前が3、後ろの計6チャンネルです。映画館はスピーカーが左右いっぱいありまして、背面の壁と左右の壁、これを一面ずつ切り分けて、効果のコントラストに使おうということなんです。プロロジックを思い出して下さい。2チャンネル信号からセンターチャンネルを引っぱり出して、ますます増え、それと同じことをリアでやって、センターリアを抽出するわけです。」

「リア3チャンネルは制作者が考えた形で出すんですけど、同時に2チャンネル再生がかなうわけですから、サラウンドEXが設備されていない映画館でも再生可能という互換性が特徴です。なるほど、ここにも互換性という

「技術的な先進性ということではないです。DTSから学ぶものはないです。DTSという大きなバックアップがあって、スピーカーが映画を作るのときに数がドーンと増えるような仕組みがありますから、むしろ映画館ではドルビーデジタルは最近です。ソフトに負けていたんです。一方で、民生用ではDTSは後からきて乗り遅れているという状況です。ですからAVファンには何となくDTSの方が新しいという雰囲気が出されています。けど、我々から見れば新しい技術だとは思っていませんし、我々は最新のいい車に乗っています。ただ、悪魔の悪い車を買ってしまっている。今、A社、B社、C社のF特は20K、B社アンブレラは40KだからB社の方が高品質と勝手に言っています。ただ、確かに2方式になったとしても、活気はありますね。そういう意味ではDTSも早くソフトを出して、ファンを作るということ、業界全体には貢献できるのではないかと。同一条件でのエンコード、デコード品質評価のテストならドルビーはいつでも受け付けて立ちます。要は業界を引っ張る役がほしいわけですし、ドルビーデジタルはちゃんとサポートしてあげたいです。DTSから学ぶものは、音質評価なら受けて立つ」

昨年ホームDTSの登場に驚かされた感があったが、伏木氏はDTSをどう見ていらっしやるのだろうか。

「DTSから学ぶものは、音質評価なら受けて立つ」